

小ファウスティナを描いた貨幣上の子供の図像について

王朝を継続させる存在としての Augusta¹

木戸口聡子

はじめに

この小論は、アンニア・ガレリア・ファウスティナ(Annia Galeria Faustina)²の肖像が用いられた貨幣に、子供の姿が頻繁に描かれた理由について考察を加えることで、彼女がアントニヌス・ピウスとマルクス・アウレリウスの時代に果たした政治的役割を明らかにすることを目指している。

小ファウスティナは 2 世紀の古代ローマに生きた女性で、皇帝アントニヌス・ピウスの娘、皇帝マルクス・アウレリウスの妻、皇帝コンモドゥスの母であった。彼女は 130 年頃産まれ、145 年にマルクスと結婚した。そして、175 年に亡くなるまでに少なくとも 14 人の子供を出産し、没後は神格化の榮譽を受けた³。

彼女は、約 30 年に亘って皇帝と近い存在であり続けたため、カッシウス・ディオ『ローマ史』や『ローマ皇帝群像』のような文献史料によって、彼女の結婚・出産の経緯や称号などを手掛かりに、彼女の政治的役割を明らかにする研究が行われてきた⁴。その結果、彼女が皇帝の子孫を産むことで円滑な皇位継承に貢献していたことや、皇帝が持ちえない女性性を体現する政治的なアイコンとして機能していたことが明らかにされた⁵。

ただ、文献史料のみからでは彼女が果たしていた政治的役割を十全に知ることが難しかった。そこで、この小論では彼女の肖像が表面に用いられた貨幣の図像に注目する。史料として貨幣を用いるのは、帝政初期のローマにおいて、貨幣が公的なプロパガンダの側面を備え、図像や刻文によって支配者のイメージや声明を世に広める機能を有していたからである⁶。そのため、刻文から鑄造年代を把握することが容易な皇帝やその後継者の肖像が用いられた貨幣は、諸皇帝の政策を知るための重要な史料として用いられてきた⁷。

加えて、昨今では、女性の肖像が使われた貨幣も同様に、皇帝達のプロパガンダの道具だった可能性が指摘されている。時の政権は、女性の肖像を用いた貨幣に様々な神格を描くことで、

その女性が有した徳目や神々との関係性を表現したと見なされるようになり、ある女性が貨幣の図像を通してどの神格と関連付けられたか調べることで、彼女が果たした政治的役割を知る便になると考えられるようになった⁸。そして、Mikocki や Keltanen らの研究によって、女性の肖像が用いられた貨幣には、女性の美德を象徴する神格や国家の繁栄・安寧・継続性を象徴する神格が頻繁に描かれたことが明らかにされた⁹。

小ファウスティナの貨幣にも、同様の主題が多く見られる¹⁰。ただ、彼女の貨幣の場合、他の女性のものと比較して、子供が描かれた図像が極めて多いという特徴がある。古代ローマにおいて子供が貨幣に描かれるのは稀だった¹¹。故に、政治的な媒体たる貨幣に子供の姿が頻繁に描かれた理由を検討することによって、小ファウスティナが果たした政治的役割の一端を明らかにできると期待される。

小ファウスティナの貨幣に描かれた子供の図像については先行研究が存在し、マルクス時代に描かれた図像を中心に、その制作意図が検討されてきた。たとえば Baharal は、マルクスが彼女の多産を高く評価したからだと思なした¹²。他方 Keltanen は、マルクス時代の政権が子供の図像を通して政治の安定性をアピールしようとしていたからだとした¹³。また Rawson は、マルクスと小ファウスティナの子供達が将来の繁栄の象徴と見なされたため、貨幣に子供の姿が描かれ、その出生が祝福されたと主張した¹⁴。しかし、アントニヌス時代に鑄造された貨幣の図像の体系的な研究は未だ行われておらず、貨幣の鑄造年代とそこに描かれている図像の関連性もほとんど考慮されてこなかった¹⁵。

そこでこの小論では、アントニヌス時代とマルクス時代に鑄造された小ファウスティナの肖像が用いられた貨幣に見られる子供が描かれた図像を研究対象とし、選択された図像の違いを時期毎に明らかにすることで、彼女が果たした政治的役割を検討することにした。

調査は以下のような方法で行った。貨幣は、掲載されている量が多く、貨幣ごとの発見頻度も記載されている *Roman Imperial Coinage(RIC)* シリーズに依拠した。まず、*RIC* に掲載されている小ファウスティナの肖像が使われた貨幣の中で子供が描かれているものを探し、鑄造年代を推測した。その際、貨幣に用いられている小ファウスティナの肖像を 9 種類に分類し、肖像ごとの使用期間を推測した Fittschen の説に倣った¹⁶。それぞれの肖像タイプ(Die Bildnistypen)の使用期間は表 1 の通りである。次に、図像が描かれた歴史的背景について検討した。そして最終的に、小ファウスティナの貨幣に子供の姿が頻繁に描かれた政治的理由について考察を加えた。

[表 1 Fittschen による肖像タイプの分類とその使用期間]¹⁷

肖像タイプ	使用期間
タイプ 1	147-148 年頃
タイプ 2	149 年頃
タイプ 3	150 年頃
タイプ 4	151 年頃
タイプ 5	152-161 年以降
タイプ 6	159 年-
タイプ 7	161 年-
タイプ 8	162 年-
タイプ 9	170 年代後半-180 年頃

論文の構成について説明する。まず、結婚や出産の経緯を中心に、小ファウスティナの生涯を概観する。次に、彼女の肖像が用いられた貨幣に描かれた子供の図像の特徴をまとめ、それらが製作された理由を検討する。そして最後に、小ファウスティナの貨幣に子供の図像が多く描かれた理由と、彼女の政治的役割について述べる。

1. ファウスティナの結婚と出産について

この章では、小ファウスティナの貨幣に子供の姿が頻繁に描かれた背景を明らかにするため、彼女の結婚と出産の経緯を概観する。

(1) 小ファウスティナの結婚について

この節では、小ファウスティナの婚約と結婚を巡る経緯とその政治的重要性について概観する。彼女が 145 年にマルクスと結婚するまでには、複雑な経緯があった。

彼女が初めて婚約したのは 138 年のことであり、それは皇帝ハドリアヌスの意向であった。ハドリアヌスは亡くなった自身の後継者アエリウス・カエサル¹⁸の代わりに、アントニヌスを後継者に指名すると共に、彼にアエリウス・カエサルの遺児であるルキウスと、自身の遠縁にあたるアンニウス・ウェルス(後のマルクス・アウレリウス)を養子に取らせ、ルキウスと小ファウスティナ、マルクスとケイオニア・ファビアとの婚約を決めた¹⁹。しかし、ハドリアヌスの跡を継いで即位したアントニヌスは、彼の没後にこれらの婚約を破棄し、小ファウスティナを改めてマルクスと婚約させた²⁰。

ハドリアヌスの後継者政策と小ファウスティナの婚約を巡る問題は謎に満ちており、古来よ

り様々な説が唱えられてきた²¹。たとえば、エウトロピウスや『ローマ皇帝群像』の著者、そして多くの研究者は、ハドリアヌスが望んだ真の後継者はマルクスであり、アエリウス・カエサルもアントニヌスも彼が成熟するまでの中継ぎに過ぎず、小ファウスティナの2度の婚約は、単にハドリアヌスの後継者がアエリウス・カエサルからアントニヌスに変化したことを反映しているとしてきた²²。

一方 Barnes は、アエリウス・カエサルこそがハドリアヌスが望んだ後継者であったが、彼が早死したため、ハドリアヌスはその息子のルキウスが将来の皇位を担うことを望み、自身の後継者に指名したアントニヌスの娘である小ファウスティナと婚約させたとする。また、アントニヌスがハドリアヌスの決めた婚約を破棄し、新たに小ファウスティナとマルクスとの婚約を決めたのは、彼がルキウスよりもマルクスの方が後継者に相応しいと見なしたからだとした²³。

他方 Priwitzer は、ハドリアヌスは136年の時点では、アエリウス・カエサルからルキウスへ皇位が移行していくことを望んでいたが、アエリウス・カエサルが亡くなった時点で、アントニヌスからマルクスへ皇位が移行するのを希望するようになったと主張した。そして、『ローマ皇帝群像』のアエリウス・カエサル、マルクス、ルキウスの名前の表記を詳細に検討し、ハドリアヌスが小ファウスティナの結婚相手に指名したのは、ルキウスではなく初めからマルクスであったという説を唱えた²⁴。

ハドリアヌスがなぜ後継者としてアエリウス・カエサルとアントニヌスを選んだのかという問題を考えるにあたって、Priwitzer と南川の説が示唆的である。Priwitzer は、ハドリアヌスが法務官の仕事だったイタリアの裁判を4人の執政官格元老院議員に任せたことでイタリアを属州扱いしたとして元老院議員の不興を買ったため、彼らとの関係を改善するためにアエリウス・カエサルやアントニヌスを後継者に指名した可能性を指摘した²⁵。

同様に、南川もハドリアヌスがアエリウス・カエサルやアントニヌスを後継者に指名したのは、スペイン系勢力に属していたハドリアヌスが、イタリア系の有力者との繋がりを強化することを望んでいた可能性を指摘している。アエリウス・カエサルはイタリアの有力貴族の一人であったし、アントニヌスもガリア出身ながらも、スペイン系の勢力とも、イタリア系の勢力とも深い繋がりを有していたという²⁶。ハドリアヌスがイタリアの保守派との歩み寄りを望みアエリウス・カエサルやアントニヌスを後継者に指名したという説は、謎に満ちたハドリアヌスの行動を説明するにあたって大変説得的である。

では、小ファウスティナの結婚はどのような意味を持っていたのだろうか。Barnes も南川も、小ファウスティナの結婚がハドリアヌスやアントニヌスの後継者政策と深い関わりがあったことを指摘している²⁷。というのは、この時期でも血統は皇位の正統性を証明するものとして一定の影響力を有していたからである²⁸。

前31年、内乱に勝利したアウグストゥスは、共和政を再建するという名目でローマの伝統的な勢力を尊重しつつ、自身に権力が集中するような政体を作った。そのため、実際は1人の人物に権力が集中する君主政だが、皇帝(princeps)の地位は元老院で認められた権利の集合体であるという複雑な政体が誕生し、その権力の移行も困難になった。そこで、彼はその解決策として、血縁と姻戚関係を通して皇位継承を行うことにしたのである。故に、彼は娘のユリアの結婚相手を工夫したり、一族の男子を養子に取り、彼らに重要な地位や権力を分け与えたりすることで、円滑な皇位継承が行われるよう図ったのである²⁹。

同様に、実の息子がいなかった2世紀前半の皇帝達も女系を通して皇位継承を行った。広く皇帝の親族や姻族から選ばれた皇位継承者は、Caesar 称号や護民官職権などの後継者である証を与えられ、皇帝の身内の女性と娶せられた。そして、皇帝と血縁関係がある後継者を儲けることが期待された³⁰。

そのような状況下で、小ファウスティナがマルクス以外の男性と結婚し、子供が産まれてしまうと、その子がマルクスの皇位継承のライバルになってしまう可能性があった。そして、もし、彼女の子供とマルクスが将来皇位を争うことになれば、内乱が起これ、ローマの平和と繁栄が損なわれかねない³¹。故に、ハドリアヌスもアントニヌスも自身の後継者と見なした存在を小ファウスティナと結婚させようとした。このように彼女の結婚は、政治的に大きな意味を持ったものだったのである。

(2) 小ファウスティナと子供達

次に、マルクスと小ファウスティナの間に産まれた子供達に注目する。145年に結婚した小ファウスティナは、147年11月30日に初めての子供であるドミティア・ファウスティナを出産した。これを機に、小ファウスティナには Augusta 称号が、マルクスには護民官職権が授与された³²。このことから、彼女の出産が待ち望まれたものであったことを窺い知ることができる。その後、彼女は170年頃までの間に、2組の双子を含む少なくとも14人の子供を出産した(表2)³³。

[表 2 マルクスと小ファウスティナの子供達]³⁴

生まれ順	名前	生年	没年
1	Domitia Faustina	147年11月30日	151年
2-3(双子)	T. Aurelius Antoninus	149年	149年
2-3(双子)	T. Aelius Aurelius	149年	149年
4	Annia Aurelia Galeria Lucilla	150年3月7日	182年?
5	Annia Galeria Aurelia Faustina	151年	?(180年以降)
6	T. Aelius Antoninus	152年	152年
7	?(息子)	157/8年	157/8年
8	Fadilla	159年	?(180年以降)
9	Cornificia	160年	213年
10-11(双子)	T. Aurelius Fulvus Antoninus	161年8月31日	165年
10-11(双子)	L. Aurelius Commodus	161年8月31日	192年12月31日
12	M. Annius Verus	162年	169年
13	Hadrianus	?	?
14	Vibia Aurelia Sabina	170年?	?(180年以降)

では、小ファウスティナの子供達の姿は、どのように貨幣に描かれたのだろうか。アントニヌス時代に鑄造された貨幣、マルクス時代に鑄造された貨幣の順に、具体的に確認していく。

2. アントニヌス時代の画像

アントニヌス時代に鑄造された小ファウスティナの肖像が用いられた貨幣で子供の姿が描かれた画像は4種類ある。加えて、アントニヌスとマルクスの肖像を使用した貨幣にも子供の姿が描かれたことは特筆に値する。というのは、皇帝や後継者の貨幣に実際の子供の姿が描かれるのはこの時期にしか行われなかったからである。以下の部分では、アントニヌス時代の貨幣に子供の姿が描かれた理由について考察を加えていく。



図1 RIC III Ant., no. 512Ba
を基に筆者作製

(1) おくるみに包まれた赤子を抱くウェヌス・ゲネトリックス(創始者ウェヌス)³⁵

裏面の画像は、林檎を持ち、おくるみに包まれた赤子を抱くウェヌス・ゲネトリックスである(図1)。表面に147-8年に使われたタイプ1の肖像が描かれていることから、この画像が147年のドミティア・ファウスティナの誕生を祝って貨幣に描かれたことが分かる。また、金貨、

黄銅貨、銅貨が発見されていることから、この図像を様々な階層の人が目にしたと推測できる³⁶。

ウェヌス・ゲネトリックスはローマ人の母たる女神として信仰され、ユリウス・クラウディウス家の始祖として皇帝家と繋がり深い女神と見なされていた³⁷。そのため、リウシア以降の皇室の女性達はウェヌスの姿で彫像やカメオに描かれた³⁸。ただ、小ファウスティナ以前に、ウェヌス・ゲネトリックスと子供の誕生が関連付けられることはなかった。なぜ、ドミティア・ファウスティナの誕生は、ウェヌス・ゲネトリックスの図像を通して祝福されたのだろうか。

それは、この貨幣が皇位継承者マルクスの子供の誕生を祝福するためだけでなく、小ファウスティナが政治的に果たした役割をも顕彰するために鑄造されたからだと考えられる。この貨幣を通して、小ファウスティナの産んだドミティア・ファウスティナが、ローマの将来の繁栄を担う存在として祝福された。その一方で小ファウスティナ自身も、出産を通して将来の繁栄を保証する存在として顕彰された。このような2重のメッセージを伝えるために、ローマの母たるウェヌス・ゲネトリックスの図像が選択されたのである。

なお、同時期に作製されたマルクスの貨幣にも、1人の子供が描かれたものが2種類ある³⁹。これらも、鑄造された時期からドミティア・ファウスティナの誕生を祝って発行されたものである。

(2) 王笏を持って座るユノと2人の子供⁴⁰

次いで、150年頃に使用されたタイプ3の肖像が用いられた貨幣に、2人の子供の姿が描かれた。裏面の図像は、王笏を持って座るユノが膝の上で1人の子供をあやし、傍らにもう1人の子供が立っているというものである。貨幣が鑄造された時期から、描かれている2人の子供は、ドミティア・ファウスティナとルキッラ、もしくはルキッラとアウレリア・ファウスティナだと考えられる。

ユノはハドリアヌスの時代から貨幣に描かれるようになったが⁴¹、子供と共に描かれたのは、この時の小ファウスティナの貨幣が初めてである。彼女の貨幣にこのような図像が描かれた理由としては、ユノが結婚や出産といった女性に関わることを掌り、特に既婚女性を守護する神格であったことと、主神ユピテルの妃であり、神々の女主人として崇められていたこと⁴²が、多産な *Augusta* たる小ファウスティナの存在を表現するのに相応しいと見なされたからだと考えられる。

(3) ピエタス

150年代に鑄造された貨幣には、神々に対する敬虔さのみならず、祖国、両親、子供達、そして同胞に対する義務の履行を意味する概念であり⁴³、ドミティッラの貨幣⁴⁴以来、しばしば子供と共に描かれてきたピエタスが登場するようになった。

(i) ピエタスと1人の子供⁴⁵

表面にタイプ3の肖像が使われているため150年代初頭に鑄造されたことが分かる。裏面の画像は、ディアデマを被り、花の蕾とコルヌコピアエを持って立つピエタスの足元に、1人の子供が立っているというものである。描かれている子供は貨幣の鑄造時期から、ドミティア・ファウスティナ、またはルキッラ、もしくはアウレリア・ファウスティナだと推測できる。

(ii) 座るピエタスと1人の子供⁴⁶

表面には152年に登場し、161年にマルクスが即位した後もしばしば使用されたタイプ5の肖像が、裏面には、コルヌコピアエを持って座るピエタスと、手を挙げて立つ子供の姿が描かれた。描かれている子供は150-60年に生まれた子供の1人と考えられる。

(4) アントニヌスとマルクスの貨幣に描かれたピエタスと子供達

加えて、150年代後半-161年には、小ファウスティナの肖像が用いられた貨幣よりアントニヌスやマルクスの肖像を使用した貨幣に、子供の姿が頻繁に描かれた。ただ、彼らの貨幣に子供と一緒に描かれている神格はピエタスのみである(表3)。

[表3 アントニヌスとマルクスの肖像を用いた貨幣に描かれた子供の画像]⁴⁷

子供の数	鑄造年代	表面の肖像	裏面の画像	RICの番号
3人	157-61	アントニヌス	宝珠を持ち子供を1人抱くピエタスの両側に2人の子供が立つ	<i>RIC</i> III Ant., nos. 302A-C, 77, 1002, 1016, 1031-2, 1035, 1045
4人	160-1	アントニヌス	両腕に2人の子供を抱くピエタスの両側に2人の子供が立つ	<i>RIC</i> III Ant., nos. 313A-D, 812, 1032

4人	160-1	マルクス	両腕に2人の子供を抱くピエタスの両側に2人の子供が立つ	<i>RIC</i> III Ant., nos. 487A-B, 490, 1359A-B, 1361A-B
----	-------	------	-----------------------------	---

(5) アントニヌス時代に作られた子供の図像が描かれた貨幣の特徴について

以上のように、アントニヌス時代に鑄造された貨幣に描かれている子供の数は、概ねその当時のマルクスと小ファウスティナの子供の数と一致しているので、時期に応じて彼らの子供が貨幣に描かれたと考えられる。皇室の子供を描いた貨幣は以前にも作製されているが、子供の数がリアルタイムで変化する工夫が取り入れられたのは、この時が初めてである⁴⁸。加えて、子供の母親である小ファウスティナの肖像を用いた貨幣のみならず、アントニヌスやマルクスの貨幣にも、子供の姿が描かれたことも興味深い。男性の肖像を用いた貨幣を通して皇室の子供の誕生を祝福することは、この時期にのみ見られる現象である。

以上のことから、マルクスとファウスティナの子供が大変重要視されていたことを窺い知ることができる。また、小ファウスティナ自身がウェヌスやユノのような母性を象徴する女神と関連付けられていることから、子供を産む母たる彼女自身も貨幣を通して顕彰されたことも分かる。ただ、ファウスティナや子供達が盛んに顕彰されたことは分かるものの、その理由について明確に示されているわけではない。

しかし、彼女達が顕彰された理由を明らかにする神格もまた、小ファウスティナの貨幣に描かれている。それこそが、希望の擬人像であるスペースである。

(6) スペース

スペースは「希望」の擬人像であり、次世代を担う若者がローマにもたらす希望の象徴だと考えられていた⁴⁹。Clark は、スペースの徳を有した人物として、前2世紀に第2次ポエニ戦争で苦境に至っていたローマを救った若き英雄スキピオ・アフリカヌスや、共和政末期の内乱を收拾した若者オクタウィアヌスを挙げている⁵⁰。そして、若き指導者が有する徳とされたスペースは、帝政期に入ると皇位継承と結び付けられ、子孫を通して皇帝家が続いていくことや、新しい皇帝によって明るい将来が訪れることへ対する希望の象徴と見なされるようになった⁵¹。

そのような神格であるスペスは、41年のクラウディウスの肖像が用いられた貨幣の裏面に初めて描かれた。そこには、前進しているスペスが、花と衣の裾を持っている姿で描かれた⁵²。これは、クラウディウスの息子ブリタニクスの誕生を記念して鑄造された貨幣とされる⁵³。



図2 RIC III Ant., no. 1371
を基に筆者作製

これ以降スペスは、ウェスパシアヌス、ティトゥス、ドミティアヌス、トラヤヌス、ハドリアヌス、アエリウス・カエサル、アントニヌス、マルクス、コンモドゥスなどの貨幣に描かれた。そ

して、その時代の皇帝の肖像を使用した貨幣よりも、後継者の肖像を使用した貨幣に好んで描かれるようになった⁵⁴。その理由として Keltanen は、スペスが後継者に対する希望と、皇室の将来が希望に満ちたものであることを示すために貨幣に描かれたとするが、スペスがブリタニクスの誕生を記念して初めてローマの貨幣に描かれたことと、後継者の貨幣に好んで描かれていることから、筆者もこの説には信憑性があると考えている⁵⁵。

そのようなスペスが、Augusta のものとしては最初で最後に、アントニヌス治世下に鑄造された小ファウスティナの貨幣に描かれたのである⁵⁶。定石通り、マルクスの肖像を使用した貨幣に、より頻繁にスペスは描かれているものの、彼女の貨幣にもそれが描かれたということは、彼女がアントニヌスの後継者政策において大変重要な位置を占めていたことを示唆している。

(7) アントニヌス時代の貨幣から分かる小ファウスティナの役割について

以上のことから、アントニヌス時代に作られた小ファウスティナの肖像を用いた貨幣に子供の姿が多く描かれたのは、彼女が皇帝アントニヌスと後継者たるマルクスの血を引く子供達を多く産んだからだと推察できる。彼女は、出産を通してローマの将来の希望を産み出すという役割を果たしたため、子供の図像を通してアントニヌス時代の貨幣で盛んに顕彰されたことが明らかになった。

3. マルクス時代の図像

161年3月にアントニヌスが亡くなると、マルクスがルキウス・ウェルスと共に即位した⁵⁷。彼は即位後も、子供の姿を貨幣に描き続けたが、皇帝の肖像を用いた貨幣に子供が登場するこ

とはなくなった。ただ、子供の図像自体はアントニヌス時代よりも多く発見されており、描かれた子供の人数と種類には、1人の赤子、2人の赤子、3人の子供、4人の子供、6人の子供のものが存在する。これらの図像は、子供の生年と人数から鑑みて、Kleiner と Matheson が主張しているように、4人の子供、6人の子供と2人の赤子、1人の赤子、3人の子供の順に貨幣に描かれたと考えられる⁵⁸。

(1) フェクンディタスと4人の子供⁵⁹

アントニヌス時代はアントニヌスやマルクスの肖像を用いた貨幣にピエタスと共に描かれていた4人の娘達の姿が、マルクス時代になるとフェクンディタスと共に描かれるようになった。図像は、フェクンディタスが、2人の赤子を抱いて立ち、その両脇に2人の少女が立っているというものである。4人の子供達は、160年までに生まれ161年に生存していた4人の娘達、すなわちルキッラ、アウレリア・ファウスティナ、ファディッラ、コルニフィキアである。

(2) 双子の誕生を祝福する貨幣

次に作製されたのが、表面にタイプ5から8の肖像が、裏面に「フェクンディタスと6人の子供」と「王座で遊ぶ双子」の図像が用いられた貨幣である。それぞれ金貨、銀貨、黄銅貨、銅貨が発見されている。表面に複数の肖像タイプが見られることから、これらの図像が長期にわたって貨幣に描かれていたことが窺われる⁶⁰。故に、様々な階層の多くの人がこれらの図像を目にしたと推測できる⁶¹。

(i) フェクンディタスと6人の子供⁶²

裏面には、フェクンディタスが両腕に2人の赤子を抱き、彼女の両脇に2人ずつ4人の子供が立っている図像が描かれ、TEMPOR(um) FELIC(itas)「時の幸せ」という刻文が添えられた。2人の赤子は、161年8月31日に生まれたばかりの双子(アントニヌスとコンモドゥス)であり、立っているのは160年までに生まれた4人の娘達である。この貨幣を通して、ファウスティナの産んだ6人の子供達こそが、ローマの幸せな将来の築き手であるというメッセージが発せられた⁶³。

(ii) 王座で遊ぶ双子⁶⁴

裏面には、王座の上で遊ぶ双子が描かれ、SAECVLI FELICITAS「時代の幸せ」という刻文が付されている。双子の頭上に星が描かれている場合もある。こちらの画像には母親役のフェクンディタスも4人の姉達も登場せず、王座の上で遊ぶ双子のみが描かれている。これは、将来に「時代の幸せ」をもたらすのは、他の誰でもなくこの双子だと考えられていたことを指している。つまり、彼らが皇帝になることで、相応しい後継者がいないことで引き起こされる内乱のない幸せな時代がこれからも続くというメッセージが示されているのである⁶⁵。

(3) フェクンディタスと1人の赤子⁶⁶

次に登場したのが、162年から使われ始めたタイプ8の肖像が表面に、王笏を持ったフェクンディタスが1人の赤子を抱いている画像が裏面に描かれた貨幣である。Szaivertによると、フェクンディタスが抱いている赤子は162年に生まれたアンニウス・ウェルスだという。よってこの貨幣は、彼の誕生を祝うために発行されたと考えられる⁶⁷。

(4) 3人の子供が描かれた貨幣

3人の子供が描かれた貨幣は4種類存在し、表面にはタイプ5の肖像が用いられている。子供と一緒に描かれているのはユノとフェクンディタスである。

(i) ユノ・ルキナと3人の子供⁶⁸

裏面の刻文がIVNONI LVCINAE「ユノ・ルキナへ」であることから、描かれているのが出産を掌る神格ユノ・ルキナであることが分かる⁶⁹。画像は、1人の赤子を抱くユノ・ルキナの両脇に2人の子供が立っているというものである。立っている子供達は身長が異なっているので、双子の兄弟が揃って描かれたわけではないようだ。

(ii) フェクンディタスと3人の子供

3人の子供が描かれたフェクンディタスの画像は3種類存在する。裏面には、①2人の赤子を抱いて立つフェクンディタスの傍らに1人の少女が立っている画像⁷⁰、②1人の赤子を抱いて立つフェクンディタスの傍らに手を挙げた2人の子供が立っている画像⁷¹、③座って1人の赤子

を膝の上であやすフェクンディタスの傍らに 2 人の子供が立っている図像⁷²がそれぞれ描かれている。

(iii) 3 人の子供の同定

ユノ・ルキナ、もしくはフェクンディタスと共に、貨幣に描かれた 3 人の子供は誰だろうか。Birley は、彼らがルキッタとアウレリア・ファウスティナ、ティトゥス・アエリウスだとする⁷³。しかし、ティトゥス・アエリウスは 152 年に亡くなっているため 161 年以降に鑄造された貨幣に描かれるのは不自然である。160 年までに生まれ無事成長していた 4 人の娘の内の 3 人が描かれたという可能性もあるが、上述のように彼女達 4 人全員が描かれた図像が存在するため考えにくい。故に、162 年頃に生きていたファウスティナの年少の子供達(ファディッラ、コルニフィキア、双子のアントニヌスとコンモドゥス、アンニウス・ウェルス)の誰か 3 人が描かれていると見受けられる。

(5) マルクス時代の貨幣から分かる小ファウスティナの役割について

ではなぜマルクスの時代に、子供の姿がファウスティナの肖像を用いた貨幣に描かれることになったのだろうか。その理由を 2 点挙げるができる。

1 つは、マルクスの後継者の誕生を広く世に宣伝するためである。特に、彼の即位の年に起こった双子の男子の誕生は、大変な慶事と見なされ、彼らの誕生を祝福する貨幣が複数の意匠で作られた。皇帝の息子の誕生は、正統なる皇位継承者の誕生と捉えられ、大いに祝福されたのである。加えて、翌年のアンニウス・ウェルスの誕生も、王笏を持ったフェクンディタスが赤子を抱くという特別な図像で祝福されている。これは、初子であるドミティア・ファウスティナ以外の娘達には誕生を祝う貨幣が鑄造されていないことと好対照をなしている⁷⁴。

上述したように、五賢帝の時代でも、皇位継承において血縁関係は重要な要素とされ、皇位の正統性を示すために用いられていた。マルクスと小ファウスティナの結婚も皇帝と血縁関係がある後継者を儲けるために行われたものであった⁷⁵。そこに、皇位継承者となるような健康な男児が誕生したのである。故に彼らの誕生は、ローマの平和の継続と、将来の更なる繁栄の要として、様々な種目の貨幣を通して、広く世に知らしめられた。

2 つ目の理由として、子供達の母が小ファウスティナであることや彼女の多産を示す意図が

あったことが挙げられる。アントニヌス時代に発行された貨幣では、子供の姿がアントニヌスやマルクスの貨幣に描かれることもあった。しかしながら、マルクス時代には子どもの姿が皇帝の貨幣に描かれることはなくなった。

そこから、マルクス時代の政権に子供達の母親が小ファウスティナであることを強調する理由があったと考えられる。それは、彼女の血筋がマルクスの嫡子に皇位の正統性を与えるものだったからである。加えて、出産という行為を通して、彼女こそがマルクスから子供達への円滑な皇位の移行を保証し、将来のローマの安寧を担うような役割を果たしているとされたため、小ファウスティナの出産と多産が貨幣によって広く喧伝されたのである⁷⁶。

おわりに

以上より、アントニヌス時代には、小ファウスティナが出産を通してローマの将来に希望をもたらす存在だと見なされていたため、貨幣を通して顕彰されていたことが分かった。

他方、マルクス時代の貨幣では、小ファウスティナと子供達が顕彰された理由が、より明確に表現されていた。一方、小ファウスティナの子供達、特に 161-2 年に生まれた 3 人の男児は、将来のローマに更なる幸せと発展をもたらす存在、他方、小ファウスティナは出産を通してローマに安定をもたらす存在だと考えられたため、子供達の存在や小ファウスティナが多産と母性が貨幣を通して顕彰されていたことが明らかになった。

これらのことから、小ファウスティナに期待されていた政治的役割は、結婚と出産を通して、アントニヌス、マルクス、そしてマルクスの子供という 3 代の皇帝を繋ぐ輪のような存在になることだったと強く推測できる⁷⁷。それは、皇位継承者の貨幣に描かれることが多かったスペースが、女性のものとしては唯一、彼女の貨幣に描かれていることから窺われる。そして実際に、彼女はアントニヌスの皇位継承者であるマルクスに、結婚を通して皇位の正統性を与え、出産を通してローマの将来の平和と繁栄を担う正統な跡継ぎを提供したのである。

彼女の貨幣に子供の図像が多く描かれたのは、彼女が果たすことを期待されていて、かつ実際に果たしたこの役割を表現し、顕彰するためだったと考えられる。

¹ 定期刊行物の略語は *L'Année Philologique* に、古典文献の略語は *Oxford Classical Dictionary* 第4版に倣った。加えて、E. Groag et al., ed., *Prosopographia Imperii Romani Saecli I. II. III* (Berlin: W. de Gruyter, 1933-)は *PIR*²、Marie-Thérèse Raepsaet-Charlier, *Prosopographie des Femmes de l'ordre Sénatorial: Ier-IIe Siècles* (Leuven: Aedibus Peeters, 1987)は *FOS*、Harold Mattingly et al., *The Roman Imperial Coinage* (London: Spink and Son, 1923-)は *RIC*、Aufstieg und Niedergang der römischen Welt は *ANRW*、*RIC III Antoninus Pius* は *RIC III Ant.*、*RIC III Marcus Aurelius* は *RIC III Marc.* と略す。

² *PIR*² A716; *FOS* 63.以後、小ファウスティナと呼ぶ。

³ Jasper Burns, *Great Women of Imperial Rome: Mothers and Wives* (London: Routledge, 2007), 154-66.

⁴ Barbara M. Levick, *Faustina I and II: Imperial Women of the Golden Age* (New York: Oxford University Press, 2014), 19-39; Mary T. Boatwright, "Faustina the Younger, 'Mater Castrorum,'" in *Les Femmes Antiques Entre Sphère Privée et Sphère Publique : Actes Du Diplôme d'Études Avancées, Universités De Lausanne et Neuchâtel, 2000-2002*, ed. by Regula Frei-Stolba, et al. (Bern: Peter Lang, 2003), 249-68.

⁵ Levick, *Faustina*, 154.

⁶ Barbara M. Levick, "Propaganda and the Imperial Coinage," *Antichthon* 16 (1982): 104-16; C. H. V. Sutherland, "The Intelligibility of Roman Imperial Coin Types," *JRS* 49 (1959): 46-55.

⁷ 最近の研究では Clare Rowan の "Imaging the Golden Age: the Coinage of Antoninus Pius," *PBSR* 81 (2013): 211-46 や "Communicating a Consecratio: the Deification Coinage of Faustina I," *14th International Numismatic Congress, Glasgow, 31 Aug - 4 Sep 2009* (2012): 991-8 がある。

⁸ Minerva Keltanen, "The Public Image of the Four Empresses – Ideal Wives, Mothers, and Regents?," in *Women, Wealth and Power in the Roman Empire*, ed. Päivi Setälä, *Acta Instituti Romani Finlandiae* 25 (Rome: Institutum Romanum Finlandiae, 2002), 106-9.

⁹ Mikocki は、彫像、浮彫り、貨幣、カメオを用いて、リウィアからヘレナまでの *Augusta* がどのような神格と関連付けられていたかを明らかにした (Tomasz Mikocki, *Sub Specie Deae: les Impératrices et Princesses Romaines Assimilées à Des Déeses: Étude Iconologique* (Rome: G. Bretschneider, 1995)). Keltanen は、2世紀の4人の *Augusta*(プロティナ、サピナ、大ファウスティナ、小ファウスティナ)の肖像が用いられた貨幣が作製された政治的背景について考察を加えた(Keltanen, "Four Empresses," 105-46)。どのような神格が女性の美德を象徴する女神、あるいは国家の繁栄・安寧・継続性を象徴する女神に該当するかは、Dorora Baharal, "Public Image and Women at Court in the Era of the Adoptive Emperors (A.D. 98-180): The Case of Faustina the Younger," in *Studies in Latin Literature and Roman History* 10, ed. Carl Deroux (Brussels: Latomus, 2000), 337 の分類に倣った。

¹⁰ 女性の美德を象徴する神格の例として、コンコルディア(*RIC III Ant.*, nos. 500Aa-2B, 1372A-4C, 1392-3; *RIC III Marc.*, nos. 670-2, 1625-7)、ピエタス(*RIC III Ant.*, nos. 1379, 1402.)、フォルトゥナ(*RIC III Marc.*, no. 683)、グラティアエ(*RIC III Marc.*, no. 732)が、国家の繁栄・安寧・継続性を象徴する神格の例として、ラエティティア(*RIC III Ant.*, nos. 506A-C, 1378A-C, 1401A-C; *RIC III Marc.*, nos. 699-703, 1653-7)、ヒラリタス(*RIC III Ant.*, nos. 1375, 1396A-7; *RIC III Marc.*, nos. 684-6, 1642-3)、サルス(*RIC III Ant.*, no. 1391; *RIC III Marc.*, nos. 713-7a, 1667-72)、スペース(*RIC III Ant.*, nos. 497, 1371)、ウェスタ(*RIC III Marc.*, nos. 737, 1689-90)が挙げられる。

¹¹ Beryl Rawson, *Children and Childhood in Roman Italy* (Oxford: Oxford University Press, 2003), 21-4. 管見では、ティトゥス時代のドミティッラの肖像を用いた貨幣にローマで初めて子供の姿が描かれた(*RIC II Titus*, no. 73)。次に、ドミティアヌスの夭折した男児の姿がドミティアの貨幣に描かれた(*RIC II² Domitian*, nos. 132-5,

152-3, 156)。生きている子供の姿が初めて描かれたのが、トラヤヌス時代の大マティディアの肖像を用いた貨幣である。図像はビエタスと2人の少女で、少女達は彼女の娘サピナと小マティディアである(*RIC II Trajan*, nos. 759-761)。大ファウスティナの死後に発行された貨幣にも、フェクンディタスが1人の子供を抱いている図像が描かれた(*RIC III Ant.*, no. 1142)。

¹² Baharal, “Public Image,” 342-4.

¹³ Keltanen, “Four Empresses,” 130-44.

¹⁴ Rawson, *Children and Childhood*, 65-7, 108.

¹⁵ 管見では、唯一 Rawson がアントニヌス時代の小ファウスティナの貨幣に描かれた子どもの図像を検討している(*Ibid.*, 64-5)が散発的なものにすぎない。

¹⁶ Fittschen の研究に依拠したのは、*RIC* に大まかな鑄造年代しか記載されていないからである。基本的に女性の肖像を用いた貨幣には職歴や称号が書かれていないため、鑄造年代を推測するために様々な工夫が行われてきた。小ファウスティナの貨幣の場合には、複数の肖像が使用されており、正確な期間は不明ながらも、それぞれの肖像が異なった時期に使用されていることが明らかのため、それぞれの肖像の使用時期を割り出すことで貨幣の鑄造年代を把握しようとする試みが行われてきた。その中で一番受け入れられているのが Fittschen の説である(Liv Mariah Yarrow, “Antonine Coinage,” in *The Oxford Handbook of Greek and Roman Coinage*, ed. William E. Metcalf (Oxford: Oxford University Press, 2012), 434)。彼は小ファウスティナに子供が生まれる度に新たな肖像タイプが作製されたという仮説を立て、プロソポグラフィ的研究によって子供達の誕生年を割り出した。そして、その結果をもとに、それぞれの肖像タイプが登場した時期と使用された期間を割り出した(Klaus Fittschen, *Die Bildnistypen der Faustina Minor und die Fecunditas Augustae* (Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht, 1982), 34-43)。ただ、彼の説には反論も出されている。Szaivert は、マルクス時代に鑄造された小ファウスティナの肖像が使用されている貨幣に書かれた文字と、鑄造年代が判明している貨幣の文字の比較というより客観的な方法を用いて Fittschen の説に異議を唱えた(Wolfgang Szaivert, *Die Münzprägung der Kaiser Marcus Aurelius, Lucius Verus und Commodus (161-192)* (Vienna: Österreichische Akademie der Wissenschaften, 1986), 229-33)。他方 Ameling は、Fittschen がそれぞれの肖像タイプが使用された期間を割り出すために使用した小ファウスティナの子供の誕生年の分析に異議を唱えた。また、子供の誕生を機に新しい肖像が作られた仮説を否定し、代わりに、小ファウスティナへの *Augusta* 称号授与(147年)や夫であるマルクス・アウレリウスの即位(161年)こそが新しい肖像が作製される契機になったと考えた(Walter Ameling, “Die Kinder des Marc Aurel und die Bildnistypen der Faustina Minor,” *ZPE* 90 (1992): 147-66)。小ファウスティナの肖像タイプとその使用期間については、未だ不明な点が多く残る。決定打となるような新しい発見が求められている。

¹⁷ Fittschen, *Bildnistypen*, 34-43 をもとに作成した。

¹⁸ 136年に発病したハドリアヌスは、ケイオニウス・コンモドゥスを後継者に指名し、アエリウス・カエサルと名乗らせた(SHA, *Hadr.* 14. 5; Dio Cass., 69. 11. 2-4)。しかし彼は、138年1月1日に肺病によってハドリアヌスよりも先に亡くなってしまった(Anthony R. Birley, *Marcus Aurelius, a Biography*, rev. ed. (London: Routledge, 1993), 53; Anthony R. Birley, *Hadrian: the Restless Emperor* (London: Routledge, 1997), 289-293)。

¹⁹ ケイオニア・ファビアもアエリウス・カエサルの遺児である (Birley, *Hadrian*, 292-5)。

²⁰ Birley, *Marcus Aurelius*, 53.

²¹ *Ibid.*

²² Eutr. 8. 11; SHA, *Marc.* 16. 6。現代の研究については T. D. Barnes, “Hadrian and Lucius Verus,” *JRS* 57 (1967):

75, n. 41 参照。

²³ Barnes, “Hadrian,” 65-79.

²⁴ Stefan Priwitzer, *Faustina Minor – Ehefrau eines Idealkaisers und Mutter eines Tyrannen: Quellenkritische Untersuchungen zum Dynastischen Potential, zur Darstellung und zu Handlungsspielräumen von Kaiserfrauen im Prinzipat* (Bonn: Habelt, 2009), 15-93.

²⁵ SHA, *Hadr.* 22. 13; Priwitzer, *Faustina Minor*, 17-9.

²⁶ 南川高志『ローマ皇帝とその時代：元首政期ローマ帝国政治史の研究』（創文社、1995）、226-32。

²⁷ 南川、『ローマ皇帝』、120-1、226-32; Barnes, “Hadrian,” 65-79.

²⁸ 2世紀には、実子ではなく養子に採った最良の人物に皇位を継がせるという「養子皇帝制」が行われたとされてきた。しかし、ネルウァとトラヤヌスの関係を除いて、トラヤヌス、ハドリアヌス、アントニヌス、そしてマルクスには何らかの血縁か姻戚関係が存在しており、アエリウス・カエサルやルキウス・ウェルスが最良の人物とも言い難いことから、「養子皇帝制」の存在が否定されている(Callian Danenport and Christopher Mallan, “Hadrian’s Adoption Speech in Cassius Dio’s Roman History and the Problems of Imperial Succession,” *AJP* 135. 4 (2014): 657-61; Russel Mortimer Geer, “Second Thoughts on the Imperial Succession from Nerva to Commodus,” *TPAP* 67 (1936): 47-54)。

²⁹ Olivier Hekster, *Commodus: an Emperor at the Crossroads* (Amsterdam: J. C. Gieben, 2002), 169-73, 190-203; Mireille Corbier, “Divorce and Adoption as Roman Family Strategies,” in *Marriage, Divorce and Adoption in Ancient Rome*, ed. Beryl Rawson (Oxford: Clarendon Press, 1991), 66-76.

³⁰ Levick, *Faustina*, 56; Birley, *Marcus Aurelius*, 11; Dixon, *The Roman Mother* (London: Croom Helm, 1988), 174.

³¹ 南川、『ローマ皇帝』、120。

³² Birley, *Marcus Aurelius*, 103, 247.

³³ ファウスティナの子供の生年、名前、生まれ順は論争になってきた(Levick, *Faustina*, 115-8)。現在ではBirleyの研究が広く受け入れられている(Birley, *Marcus Aurelius*, 239, 247-8)。

³⁴ Birley, *Marcus Aurelius*, 239, 247-8 をもとに作成した。

³⁵ *RIC III Antoninus Pius*, nos. 512Aa-C, 1386A-B, 1407.

³⁶ Rowan は、金貨、銀貨、銅貨を手にする人々の階層が異なっており、貨幣の種目(denomination)ごとに異なった図像が描かれていることを指摘した(Rowan, “Imaging the Golden Age,” 238-9)。

³⁷ Michael Speidel, “Venus Victrix – Roman and Oriental,” *ANRW* 2. 17. 4 (1993): 2225-6.

³⁸ Mikocki, *Sub Specie Deae*, 113-5.

³⁹ 王笏を持って立つピエタスと1人の子供: *RIC III Ant.*, nos. 1274A-B, 1280-81B, 1294。香の箱を持って立つピエタスと1人の子供: *RIC III Ant.*, nos. 1293A-B。

⁴⁰ *RIC III Ant.*, no. 504.

⁴¹ *RIC II Hadrian*, nos. 389, 393a-94, 401a-04, 1022, 1028, 1038a-b, 1038d-e.

⁴² Mikocki, *Sub Specie Deae*, 101-3.

⁴³ Liv., 7. 10. 3-4; Cic., *Off.* 3. 90.

⁴⁴ *RIC II Titus*, no. 73.

⁴⁵ *RIC III Ant.*, nos. 1379, 1402.

⁴⁶ *RIC III Ant.*, no. 1369.

⁴⁷ *RIC* を用いて筆者が作製した。

-
- ⁴⁸ Keltanen, “Four Empresses,” 122; Mikocki, *Sub Specie Deae*, 108.
- ⁴⁹ J. Rufus Fears, “The Cult of Virtues and Roman Imperial Ideology,” *ANRW* 2. 17. 2 (1981): 861-3.
- ⁵⁰ Mark Edward Clark, “Spes in the Early Imperial Cult: ‘The Hope of Augustus,’” *Numen* 30 (1983): 88-91, 94-8.
- ⁵¹ *Ibid.*, 83-4; Edwin S. Ramage, “Denigration of Predecessor under Claudius, Galba, and Vespasian,” *Historia* 32.2 (1983): 206.
- ⁵² *RIC* I² Claudius, nos. 99, 115.
- ⁵³ Barbara M. Levick, *Claudius* (London: Bastford, 1990), 63
- ⁵⁴ ウェスパシアヌス: *RIC* II² Vespasian, nos. 596-7, 713, 730-1, 816, 823, 884-5, 894-6, 995, 1008-12, 1091, 1093. *RIC* II² Titus, nos. 372, 383. ティトウス: *RIC* II² Vespasian, nos. 636-7, 739, 751-2, 908, 914-5, 1031-4. *RIC* II² Titus, nos. 64-5, 73, 168-71, 237-8. ドミティアヌス: *RIC* II² Vespasian, nos. 654-6, 663-4, 674-5, 787-8, 836-7, 917, 926, 932-3, 1043, 1053-4, 1099. *RIC* II² Titus, nos. 86, 276, 284-5, 298-300, 316-8, 349-51. トライヤヌス: *RIC* II Trajan, nos. 127, 191, 279, 519-20. ハドリアヌス: *RIC* II Hadrian, nos. 100a-b, 181c-d, 274a, 274d-e, 612A-B, 790c-f, 834a, 834d-f. アエリウス・カエサル: *RIC* II Hadrian, nos. 435a-b, 1055a, 1055c, 1067a, 1067c. アントニヌス・ピウス: *RIC* III Ant., nos. 626, 667, 672, 687, 703A-C, 730. マルクス・アウレリウス: *RIC* III Ant., nos. 431, 437, 476, 479A-D, 485, 1251, 1257, 1320, 1346-7, 1348Aa-B, 1350a-51. コンモドゥス: *RIC* III Marc., nos. 621-2, 644, 1530, 1543-5 である。後継者の肖像が用いられた貨幣には下線を引いた。
- ⁵⁵ Keltanen, “Four Empresses,” 119.
- ⁵⁶ *RIC* III Ant., nos. 497, 1371.
- ⁵⁷ Birley, *Marcus Aurelius*, 116-7.
- ⁵⁸ Diana E. E. Kleiner, and Susan B. Matheson, ed. *I Claudia: Women in Ancient Rome* (Austin: University of Texas Press, 1996), 79.
- ⁵⁹ *RIC* III Marc., nos. 675-6, 1634-7.
- ⁶⁰ Szaivert, *Münzprägung*, 230.
- ⁶¹ 貨幣の種目と社会階層の関係については註 36 を参照。
- ⁶² *RIC* III Marc., nos. 718-20, 1673-7.
- ⁶³ Baharal, “Public Image,” 336.
- ⁶⁴ 星なし: *RIC* III Marc., nos. 1665-6. 星あり: *RIC* III Marc., nos. 709-10.
- ⁶⁵ Keltanen, “Four Empresses,” 135; Kleiner and Matheson, *I Claudia*, 79; Baharal, “Public Image,” 336.
- ⁶⁶ *RIC* III Marc., 677, 1638-40.
- ⁶⁷ Szaivert, *Münzprägung*, 230.
- ⁶⁸ *RIC* III Marc., nos. 692-3, 1649-50.
- ⁶⁹ Rawson, *Children and Childhood*, 109-10.
- ⁷⁰ *RIC* III Marc., no. 678.
- ⁷¹ *RIC* III Marc., nos. 679-80.
- ⁷² *RIC* III Marc., nos. 681-2, 1641.
- ⁷³ Birley, *Marcus Aurelius*, 108.
- ⁷⁴ 1 組目の双子の誕生(149 年)はアントニヌスの肖像が使用された貨幣で祝福されている (*RIC* III Ant., nos. 185A-B, 857, 859)。他方、アエリウス・アントニヌス(152 年)と 157 年頃生まれたとされる息子の誕生を祝う画像は見つかっていないが、彼らが貨幣を準備する前に亡くなってしまった可能性がある。

⁷⁵ Dixon, *Roman Mother*, 174.

⁷⁶ Baharal, "Public Image," 336.

⁷⁷ Levick, *Faustina*, 91-137.

Faustina the Younger and the Representation of Her Children

Satoko KIDOGUCHI

This paper examines the political role of Faustina the Younger during the reigns of Antoninus Pius and Marcus Aurelius by analysing the exceptionally large number of images of children on her coinage.

The analysis of the images of Faustina's children reveals the political importance of Faustina and her children. During the reign of Antoninus Pius, they were regarded as the connector of the dynasty. On the other hand, during the reign of Marcus Aurelius, children were considered as bearers of happiness and prosperity of future Rome, while Faustina was considered as guarantee of Roman peace through marriage and childbirth.

Consequently, the political role of Faustina, revealed through the above examination, was to connect three generations of emperors, and the images of children were used to honour this roll comprehensively.